

プラトンの〈詩人追放〉論の背景(2)

友 村 恭 子

- 1 問題の箇所(1)——『国家』第三卷
- 2 『国家』第三卷の〈模倣〉の意味
- 3 第三卷についての結語と第十卷への展望
(以上、第二〇卷第三号)

4 問題の箇所(2)——『国家』第十卷。第三卷との関係で

「それでは、次のような製作者についても、君はその男を何者と呼ぶか、考えてくれたまえ」

「どんな職人のことですか？」

「個々それぞれの手職人が作る限りのすべてのものを作る職人のことだ」

「誰か腕利きの驚くべき男のことを仰言っているのですね」

「まだ驚くには早いよ。いまずぐにも君はもっと感心するだろう。何しろ、この同じ手職人が、あらゆる家具を作ることができるばかりか、大地から生^はえるありとあらゆる植物を作り、あらゆる動物を——それも他の動物は言うに及ばず、自分自身をも——作り出し、さらに加えて、大地をも天をも神々をも、また、天にあるものすべて、地下の冥界にある何もかもを作り出すのだからね」

「全く驚くべき知恵者ですね、あなたの仰言っているのは」

「眉唾物と思っているのかね？　では言ってくれたまえ、君は、この種の職人は全面的に存在しえないと思うのかね？　それとも、ある仕方なら、い言ったものすべてを作る人もありうるけれども、ある仕方では、そんな人はありえないと思うのかね？　いや、君は、君自身でもある仕方では、それらのものすべてを作りうることに気がつかないのかね？」

「で、その仕方とはどんな？」

「別に難かしい仕方ではないよ。幾通りにでもすぐに行きわたるものだが、一番手っ取り早いのは多分、君が鏡を手にしてあらゆる方向へぐるりと回してくれさえすればいいという代物だね。そうすれば君は立ちどころに、太陽やその他の諸天体を作ることになるだろうし、たちまちにして大地を、たちまちにして君自身をもその他の動物をも、家具をも植物をも、それから、いまい方言っていたものすべてを作り出すだろう」

「ええ、見かけだけのもの (gamyjeua) をね、しかし決して本当にあるのではないものを、ですけれども」

「うまく言ってくれたね！　それこそ、いまの議論にちょうど必要なことなのだ。というのは、思うに、画家もまたその種の製作者の仲間なのだ。そうではないかね？」

「むろんそうです」

「だがしかし、画家の作り出すものは本物ではないと君は主張するに違いない——とぼくは思う。それでもとにかく、ある仕方では、画家もまた寝椅子を作るわけだ。そうではないか？」

「ええ、画家もまた作りますね、見かけだけの寝椅子をなら⁽¹⁾」

以上は『国家』第十巻の冒頭近くでの、ソクラテスとグラウコンの対話である。

われわれがすでに見たように、プラトンはこの同じ『国家』の第二巻から第三巻にかけて、音楽・文芸の批判を試み、特に第三巻においては、あらゆる人物、あらゆる事物を模倣するものとしての詩人・作家（ποιητής）は、楽しい（χαίρειν）人々には違いないが、あるべき理想のポリスからは追放されなければならない、と明言していた。⁽²⁾

そしてこの第十巻で、再び模倣（描写）としての詩の問題が取り上げられたのであるが、ここでは詩人が画家になぞらえられるのである。画家は事物のあるがままを模倣（描写）するのではなく、見かけだけの姿を見えるがままに模倣することだけを狙うものだから、それだけ無責任にあらゆるものを描写して作り上げるのである（X 598B）。そしてそれは、われわれが錯覚を起こすという弱点を持っているのにつけ込んで、われわれを欺くものであるが（602CD）、詩人もまた、真実とはほど遠い低劣なものを作り出す点でも、魂の低劣な部分に訴えるという点でも、画家の片割れたとして規定できる（605AB）——というのである。

ところで、この第十巻の詩人批判論は、この章の末尾でも触れるように、これが『国家』全体の中で、どう位置づけられるかという点においても、第三巻での文芸批判との関係においても、あるいはこれを、プラトンの〈音楽・文芸〉観と見てよいかどうかについても、とかく論議を巻き起こして来たのであって、いわばおさまりの悪い箇所とも言えるのである。

そこでわれわれとしては、改めて第三巻の文芸批評が『国家』全体の中でどういう位置にあるかを再確認しながら、第十巻の解釈の問題を展望し、それから改めて〈模倣〉がプラトンの〈音楽・文芸〉観とどう関連するであろうかについて考えたいと思う。

*

*

第三巻の文芸批評はもともと、ポリスの守護者の教育をめぐるものであったが、そのポリスの制度は次のようなも

ののである。——ポリスを守る軍人たる補助者は、本来、ポリスの一般市民に対しては牧羊犬のような立場にあるが、この犬たちが狼に変身することのないように、彼ら補助者も最高指導者たちも、およそポリスの守護を任務とする人々は、どうしてもやむをえないものを除いて、私有財産 (*οἰκία ἰδία*) なるものを所有することは全く禁止されるべきであること (III 416A ~ N 420A)。また、たとえば犬にしても牝犬と牡犬の間に分業があるわけでもなく、禿頭の人と頭髪のある人の例にしても、両者はある意味では自然的素質 (*οὐρεῖν*) を異にしてはいても、それが職業への適性の一般的な指標になるわけでもないのと同様、男と女にしても、前者は子供を生まれ後者は子供を生むという相違点があるからと言って、これが男女別の分業の根拠になるとは言えない。従って、両者では、いろいろの面で比較的強い・弱い差はあるにしても、両性とも個人の素質に応じてどんな仕事にも携りうる。だから、ポリスの守護に素質のある女は、同様の素質の男とともに守護の任に当らなければならない、その教育も、男の場合に考えられた守護者の教育と同様でなければならないこと (V 451D ~ 456B)。こうして、守護者・補助者の男女は、私有財産も許されていないという状況のもとで、家も食事も共同、学ぶのも男女共学である以上、両性の間に恋が芽生えるのも必定であるが、犬や馬の場合に良い血統が伝えられるようにと飼主が配慮しなければならないのと同様、人間である彼らの結婚と子供づくりについても、最高指導者たちが工夫して、結婚する当事者には偶然に配偶者が決まったと思わせながら、実際には最もすぐれた男たちが最もすぐれた女たちとできるだけしばしば交わるようになるような秘密の籤を作るべきである。そして生まれた子供は役人の手で保育所へ連れて行かれて保母の手に委ねられ、そのさい、授乳に訪れる母親にも、自分の子供がわからないように、あらゆる手立を講じる。そして親たちは結婚の日から数えて自分の子供でありうる年令層の子供すべてを息子・娘と呼び、後者は前者すべてを父母として、また、自分と同じ年令層の仲間すべてを兄弟・姉妹として呼ぶであろうこと (V 457D ~ 461E) ⁽⁶⁾。

『国家』の語り手ソクラテスが提案するこれらの構想は当然のように、対話相手のアディマントスやグラウコンを驚かせたり、首を傾げさせたりする⁽⁴⁾。

ところでもともと、この『国家』は、裕福で節度ある老人ケパロスが、老年を嘆く人の多い中で自分が爽やかに平静に老年を過しているのは、一つには、自分には財産があるおかげで、嘘を吐くとか借金を返さないとかいう不正を犯さずにすんだためであること、自分としては、分別ある人間に関する限り、こうしたことを可能にする点にこそ、富の最大の効用があるのだとしたい（I 329A～331B）、と語ったのに端を発して展開される議論を内容とするものであった。すなわち、ケパロスのこの発言に対してソクラテスが、しかし正直であること、あずかったものを返すことが〈正義〉（*dikaion*）の規定だとして無条件的に主張しうるか？ という疑問を捜み（331CD）、そこから〈正義〉をめぐる、「正しいポリスとはどういうものか」「正しい個人とはどういうものか」といった問題へと議論は発展して行くのである。そして、いま右に挙げた、守護者・補助者の私有財産禁止、妻子共有といった制度は、「正義の実現しているポリスとはこのようなものであるべきだろう」として提案されたものである。もっとも、『国家』の主題が国家（ポリス）論なのか、正義論なのかをめぐって、古くから多々議論がある⁽⁵⁾。しかしわれわれとしては、いまは差し当り、少なくとも、「正義とは何か？」の問題に端を発して、いわばその核から、国制の問題を含む議論全体が展開しているとの観点で、この『国家』を見ることにしたい⁽⁶⁾。

本稿は、プラトンの文芸批判の検討を主題にしているわけであるが、前回（第1章／第3章）で扱った、『国家』第二巻／第三巻では、たしかに、あるべき理想のポリスでの、守護者・補助者のいわば情操教育はどのようでなければならぬかの問題をめぐって、たとえば、神々どうしの復讐劇だとか、英雄が悲嘆にくれて取り乱す情景だとかを巧みに描写（模倣）して、観客・聴衆の感情を高ぶらせたり、冥界の恐ろしい光景を描いて死への恐怖をかき立て

たりする詩（叙事詩であれ悲劇であれ、他の分野のものであれ）だとか、あるいは音階（旋法）にしても、哀調を帯びたものや酒宴用のもの⁽⁷⁾とかは、このあるべきポリスには受け入れてはならない、と言われていた。こうした批判はむしろ、単に、視聴者の内部に潜む獸性や劣情をかき立てて視聴率を高めることだけを目当てに、むやみになまなましく殺人現場を映像化したり、登場人物がひっきりなしに涙を流しているところを演出したりするような、今日のTVの低俗番組に対する良識人の批判にも通じる。それに、第三巻で文芸批判をしているプラトンが、恐れを知らない好戦的な兵隊の養成を目指しているのではなく、逆に「節度」(sôphrosunē)を具え、「優美さ」(kalokagathia)を具えた、「教養ある人」(音楽・文芸の教育を身につけた人)として守護者・補助者を育成すべきだとしていることを、われわれはここで確認しておかなければならない。

しかしわれわれが先に見た、守護者階層の私有財産禁止、妻子共有といった制度の提案と併せて、プラトンのこの文芸批判を見るとき——そうした制度に耐えうる守護者も、その中から選ばれる最高指導者も、無私無欲の公正な人々たちには違いないにしても——こうした制度の提案を背景とした文芸批判の図は、全体主義的軍事国家の検閲制度を思わせる。むしろプラトンは、現実には、権力志向の人間や、金銭至上主義者や、あるいは完全に自制心を失った暴君が政權を握っているのだという認識に立ち、そういう政体のもとで養なわれ、そういう政權の出現を可能とするような市民のメンタリティーを批判し分析して来たのであって、こうした、いわば「病めるポリス」⁽¹⁰⁾に対して——恐らくはこの地上では実現不可能ではあろうけれども——純粹に健康なポリスのあり方として、私有財産禁止、妻子の共有といった制度を、言論⁽⁹⁾の上で構想したのであった。そしてその中で、現実には市民たちの世界観・価値観に圧倒的な影響力を持った、叙事詩・抒情詩・悲劇・喜劇などを、プラトンが批判しているのは言うまでもない。

しかしわれわれとしてここで問題にしたいのは、次のような点である。

国制がまず先に構想され、それに即して、音楽・文芸の問題が、青少年の情操教育の問題として、付随的に考えられているのか？ ということ。——われわれが第1章の冒頭で引用した、第三巻の〈詩人追放〉の言明において、プラトンは、あらゆる人物・あらゆる事物を巧みに模倣（描写）する詩人は、楽しい（*joyous*）人には違いないが、われわれのポリスにはそのような詩人が入り込むことは許されない、われわれとしては〈有益〉ということを考えて、すぐれた人物の口調やその語るところの内容のみを模倣する、お渋い詩人や物語作家を採用するのだ、と言っていた。むろん、まだ若くて、何故という理を把握するにはいならず、しかし他面、きわめて影響を受けやすくて、とりわけリズムや調べに心を奪われる年少者たちは、美的環境の中で育てられ習慣づけられなければならないのには違いない。⁽¹³⁾しかしまず、〈すぐれている人〉とはという人を言うのか？ プラトンはまさに、問題を孕みながら説得力を持って一般に浸透している価値観を、初期著作以来ずっと批判し続けて来たのであり、この『国家』においても、〈正義〉についてのケパロスの常識的で穩健な見解の孕む問題点の指摘を皮切りに、「正義とは強者の利益なのだ」とする自信満々の弁論家トラシマコス⁽¹⁵⁾の主張を批判しているのである。そしてそこからさらに、——正しいとの評判を得れば人々から評価されるから、あるいは神々から報われるから、正しくすべきだというのではなく——〈正義〉がそれ自体として実質的に、その所有者に対してどういう力（*dynamis*. 353B）を持つのかという、グラウコンやアディマントスの質問（II 357A~367E）に対して、ソクラテスが、一個人の場合よりも、より規模の大きいポリス全体に注目して、正しいポリスとはどういうものであるかを考えるべく、あるべき理想の制度を言論の上で構想しながら、かの私有財産禁止だとか妻子共有だとかを提案したのである。従って、『国家』の主題はもともと〈正しい（正常な、健全な）ポリス〉、あるいはむしろ〈正しい個人〉とはどのようなものかということだと解しうるなら、すでにそうした発想のもとで構想された理想のポリスの守護者の教養をめぐっての文芸批判にしても、〈正しい個人〉の魂を養な

う、その個人のあり方に即した音楽・文芸とは何か、という点に主眼があるのだろうし、またそうでなければプラトンの文芸批評にも大した意味はないと言える。⁽¹⁷⁾そして実際、プラトンは第四巻で、〈人〉というものを、その魂に、事の善し悪しを勘考する〈理知的部分〉(τὸ λογικόν)と、これを補佐してくれる味方ではあるが、愚直な兵隊のように憤慨して暴走しがちな〈気慨の部分〉(τὸ θυμικόν)と、そして、全く衝動的・盲目的で恥知らずの獣じみた〈欲望の部分〉(τὸ ἐπιθυμητικόν)という三つの部分を含えた多元的存在であることを確認した⁽¹⁸⁾後、これが本来の秩序を外れて、たとえば〈気慨〉が肥大して最上位に君臨すると、名譽志向・権力志向の人間が生じ、これに対応して〈名譽支配制〉(τιμοκρατία 545C)が生じるというように、魂三分説の観点から、墮落した政治形態を述べて行くのである。⁽²⁰⁾そして、魂の最下位の部分たる獸的欲望に全面的に支配されている者としての〈独裁者の人間〉(ὁ τυραννικός)には〈独裁制〉(τυραννία)が対応するのであるが、⁽²¹⁾第八巻〜九巻で以上のような、個人とポリスのあり方を辿った後、第十巻の冒頭で再び文芸批判の問題へと帰ってくる。ソクラテスは言論の上で自分が構想したポリスをふり返りながら、自分のポリス建設の仕方は他の多くの点でも正しかったと思うが、とりわけ模倣的な詩 (μυμνηστική [sc. πόησις] 559A) を受け入れなかったは正しかったと思う、と述べ、そしてその理由を示すべく、画家になぞらえて詩人を、単に見かけを作る人として位置づけているのが、本章冒頭でわれわれが引用した箇所なのである。

従って、第三巻では、たしかに守護者たるべき若者の教育をめぐる文芸批判が行なわれたという形を取っているが、全体として、〈正しさ〉とは何かを問題とし、〈正しいポリス〉〈正しい個人〉のモデルを構築して、それを基準に、現実のポリスの状態と、それによって養なわれその出現を可能にする個人の精神性を、〈病的〉として診断するのがその主題であったと言えるだろう。そしてとりわけ、アテナイの現実であった、票決権を握る〈多数者〉を主権者とする〈民主政治〉⁽²²⁾が、実際には、大衆演説家の台詞——語る内容は何ら根拠のあるものではないが、聴衆の

心にひそむ低劣な部分、つまり、すぐ氣分に感染して夢見心地で暴走する衝動的部分に訴えるという——によつて動かされるものであることを、いわば深層心理を分析するようにして示し、そしてこうした〈民主制〉が、やがてその低劣な部分が最大限に肥大した存在とも言うべき〈独裁者〉を生むにいたる必然性を示すというところにも、この『国家』の一つの大きな目的があつたと言えるだろう。⁽²³⁾

しかしこうした全体的な流れを背景として見るとき、第三巻において守護者の魂を養ふ美的環境を提供するものとして、きわめて重視された、音楽・文芸は^{ミュージック}どういう扱いを受けるのだろうか？ 少なくともこの第十巻では、実物ではなく、見せかけの映像を作るものとしての画家に、詩人がなぞらえられ、詩人は画家の片割れとして、魂の低劣な部分呼びさましてこれを強力にし、〈理知的部分〉を滅ぼしてまうから、これをポリスに受け入れてはならない(605A B)、ホメロスが最も詩人らしい詩人であることは認めなければならないにしても、しかし詩の作品としては、神々への頌歌とすぐれた人々への讃歌だけしか、ポリスに受け入れてはならない(607A)、と言われるのである。

だが、ここでわれわれは再び振り出しに戻る。いったいプラトンは、〈正しいポリス〉の成員たる、〈正しい個人〉のあり方を損ねるものとして、詩人の種族を放逐しようとしているのか？——

次のような箇所はやはり、現代のわれわれに——そして多分プラトンの同時代人にも——やはり抵抗を覚えさせるものではないだろうか。

「親愛なるホメロスよ」と、ソクラテスはホメロスに呼びかけるといふ形で語る「もしもあなたが……(単なる模倣者でなく)どのような仕事か公私において人間を向上させたり、あるいは墮落させたりするのかを認識することができたというのなら、どうかわれわれに言ってもらいたい——たとえばリュクルゴスのおかげでスパルタの統治は善

くなったし、また、他の多くの人々のおかげで善くなったポリスも大小いろいろとあるけれども、それと同じようにあなたのおかげで統治が善くなったというどんなポリスがあるのか？」(X 599DE)。

また、「模倣する人は、自分が模倣(描写)する当のものについて、言うに足るほどの知識は何も持ち合わせてはいないのであって、模倣とはある種の遊戯(*paidia*)でしかなく、真面目な仕事ではないのだ」(602B)。

われわれは先ほど、群衆である限りの民衆の心の奥に潜在する獸的・衝動的部分が、こうした群衆に迎向しようとする模倣者としての詩人や大衆演説家の低劣な演技によって呼び醒され肥大させられるのだという、プラトンの分析を見た。そして、この第十巻で再び文芸批評の問題に帰って来たわけであるが、かつての第三巻では、若者に美的環境を与えるものとしての音楽・文芸はどのようなべきかという観点から、低劣なものを模倣する詩が問題とされているのが見られたが、ここでは悲劇にせよホメロスにせよ、およそ「模倣(描写)」による作品はすべて、人間の魂の低劣な部分に働きかけるものとされたわけである、その上、いま右に挙げた箇所に関する限り、これは、演劇も絵画も要するに遊戯に過ぎないと断定する、いわゆるリアリストの——そして多分音楽・文芸に素養のない「非音楽的」な(「無教養な」)——政治家の発言のようにも見える。⁽²⁵⁾

もっとも、この第十巻の文芸批判は、余談として語られたものか、あるいは付録のようなものかも知れないし、第八巻から第九巻にわたって「不正な人間」の成立と実態を描いて来たプラトンが、そうした人間を育む悪しき描写芸術のことだけを、第三巻を顧みながら、ここで特記したのかも知れない。しかし人の錯覚につけ込む詐欺師としての詩人の本性を曝露するための例として挙げられた、画家についての評言を見ると、これはプラトン本人のものといふより、ある程度は、無骨者のソクラテスのものと言えるかも知れない、と見る向きもある。⁽²⁸⁾

しかし、こうした問題はここでは保留することにして、われわれとしては、この第十巻に入る前に、——そして第

八、第九卷での人間とポリス全体の墮落形態を描くにも先立って——墮落する前の理想のポリスでの最高指導者たるべき〈哲学者〉の条件と、それにふさわしい教育のあり方が述べられていることを思い起こしたい。⁽²⁹⁾そしてそこではむしろ、哲学者は真正な〈美〉に愛着を寄せるものだと言われていたのである。それでは、この〈美〉と、〈音楽・文芸〉^{レク}とはどういう関係にあるのか？

5 〈哲学〉と〈詩〉

ここで改めてもう一度、第三巻を顧みたい。ここでは、若者への叙事詩・悲劇などの影響力を考えて、いろいろな作品が吟味され選別され、守護者たるべき若者について、彼らがもし模倣するなら、立派な人々や事柄を模倣すべきだ、と言われた(395C)ではあるが、しかし、そもそも模倣者としての詩人にいかがわしい点があり、守護者たるべき若者にしても、本来、模倣に手を出してはならないのだということが、次のような理由とともに言われていたことに注意したいのである。——

あらゆる人物・事物を模倣するような語り手は「彼がつまりぬ人物であればあるだけ、それだけいっそう何でもを模倣する⁽³⁰⁾だろうし、どんなことでも自分にふさわしくないと決して思わないだろう」(397A)。

また「各人、一人で一つの仕事をすれば立派にできるだろうが、一人で多くの仕事に手を出せばそうは行かない」(394E)。

これは前章の冒頭で挙げた、第十巻における画家批判の立場(X 598B)と同様である。

一般に人々が、仔馬や仔牛を育てる時には、馬事や農事に明るい専門家を呼んで来るだろうか、自分たちの息子の教育のことになると、これをソフィストに委ねて平気だというのが不思議だ、とソクラテスが言っているのが、『ソ

クラテスの弁明⁽³¹⁾』や『プロタゴラス』⁽³²⁾やその他プラトンの対話篇の処々に見られるのは言うまでもない。そして、ソフィストの一人であり、弁論術の教師を標榜したゴルギアスが、自分は弁論術という立派な技術(τέχνη)を心得ているのだと誇らしげに語ったのに対し、ソクラテスが、医師や機械術の場合と違って、弁論術というものが、自ら語っている当の事柄の内容についての知識も持たないまま、言葉だけを駆使して語る限り、それは相手を説得して思い込ませるだけのものではないか、と指摘していた『ゴルギアス』中の箇所⁽³³⁾をも思い起こしておきたい。

そして、この『国家』第十巻においても、先ほど見たように、詩人がそれになぞらえられた、かの画家について、画家は職人が作った実物の寝椅子の、見かけの姿だけを模倣するものと言われ、その分だけ、職人とくらべても真実から、かけ離れているとされていたのである(387E)。この絵画論が近代人の鑒鑒を買ったことは前にも言及したが⁽³⁴⁾、われわれとしては、模倣よりも実物を重視するという意味でのリアリズムが初期の頃からのプラトンに見られ、この『国家』においても貫かれているのを確認しておきたい。

しかしこのことと、〈哲学者〉がポリスの最高指導者たるべきだと言われたことと、そして〈哲学者〉は〈美〉に愛着を寄せるものだということがどう関連するのか？

この問題を詳論するとなると、これはまた別の議論となる。しかしわれわれとしては、〈模倣者〉としての詩人を追放するということが、プラトンの全体的な立場から見てどういう意味を持ちうるかを、なおいまま少し検討し、〈音楽・文芸〉⁽³⁵⁾がプラトンにとってどういう意味を持ちえたかを、若干でも展望するために、いま右に挙げた問題について、一応次のような関連づけのスケッチを試みておきたい。

もともと、弁論術を重宝なものとして誇った、『ゴルギアス』中のゴルギアスにしても、個別的な場面で、弁舌によって医師や建築家のふりをしてまかり通る手段として弁論術を重宝としていたわけではなく、法廷の裁判官や政務

審議会の議員や民会の列席者といった、多、教、者、を相手に、これを説得して、政治の動向を左右するのを可能にしてくれるところ、弁論術の効用を認めていたのである。⁽³⁵⁾

しかし、こうした局面で、ポリス全体にとって、何が善いこと・有益なことなのか、あるいは何が健全で正當なことなのかについて、真正な仕方で吟味する方法があるかどうかなど考えも及ばないまま、人々が大衆演説家の弁舌によって、その都度、まるで幻影に誑かされているかのように夢見心地で暴走するという事態をこそ、プラトンが危機として受け止め、これを解決すべき最大の課題としていたことは、この『国家』の場合について、われわれがすでに見て来たところである。

この『国家』の第六巻における〈線分の比喩〉⁽³⁶⁾において、少なくとも感覚界（可視界、*opartha*）が明確さの度合に依じて二分され、より明確な領域のものが、似像・模像（*eikasia*）の世界であり、より明確な領域のものが、そうした似像の原物たる、動・植物や、いわゆる実物のすべて、と言われていたことを思い出したい。そしてこれらはむしろ、それぞれを捉える、われわれの側の能力に依じてあらわれるものであって、似像に対応する能力は、こうした幻影に誑かされる程度のものたる、〈影像知覚〉（*eikasia*）であり、より明確な実物に対応する能力は、〈確信〉（*tharsos*）なのである。

〈影像知覚〉から〈確信〉への上昇は、麻薬患者の幻覚状態のような状況からの脱出を意味するものとも言えるだろう。先ほど挙げた第十巻で、画家が、実物を扱う職人以下の存在とされていたのをわれわれは見たが、実際こうした〈線分の比喩〉の観点からする限り、そこいらの動植物や家具などを、ただ見えるがままに描写しているなどは、いわゆる〈美術〉——とにかく美の語が付加されているものとしての——でもありえない。後でも見るように、能動的・知的（知的の意味についても後で補わなければならないが）に把握されないものに、〈美〉はあらわれては来な

いだらうからである。

しかし〈感覚界〉は〈可知界〉(νοῦς)とくらべると、全体として不明確である。少なくとも、推理したり計算したりする知的能力が捉えるものでない限り、不明確なのである。この〈可知界〉に属するものとして、まず考えられるのは、数や図形の世界であり、これを捉えるわれわれの側の能力は、推理的・悟性的能力(διανοια)なのである。だがしかしこうした能力は、仮設(ὑποθέσεις)を立てて、そこから下降するだけの能力であって、たとえばその仮設を何故選択しなければならぬのか、とか、その仮設の根拠となっている、もう一つ上位の大前提は何なのかを吟味するといったところへは及ばない。

さて、〈可知界〉において、仮設から下降するしかないという意味でより不明確なものたる前者の領域よりも、仮設から遡って、もはや仮設でないものへと上昇して行くことによって把握されて行く故に、明確さにおいて前者にまさる領域が置かれるのであるが、これが〈知性的思惟〉(νοῦς)の把握するところの〈認識されるもの〉(γνωστόν)であり、この領域に踏み込んで行くのが〈哲学者〉⁽³⁷⁾なのである。

これを詳論するという厄介な問題には、いまは立入らないことにして、われわれは〈美〉との関係で、いま右に記したことにについて、ただ次のような点を挙げておきたい。

すでに『パイドン』においても語り手ソクラテスは次のように言っていたのである。——自然の物体のメカニズムを手当り次第に辿るだけでは、この自然世界全体については混乱した当てずっぽうの思惑の域を出ることはできないし、⁽³⁸⁾個々のそうしたメカニズムを辿るのではなく、そうした物体のメカニズムを必要条件として、全体を善くあるようにと配置している真の原因者をこそ見出すべきだろうし、自分はそれを求めているのだ——と。⁽³⁹⁾個々の事物の特性を巧みに配置して、全体として一体性あり協調する善き世界をつくり出すという、この『パイドン』にも、後の

『ティマイオス』にも見られる、世界原因者の像は、〈哲人王〉の——ただしこれは人間である以上、そこへと向上して行く途上にあるという条件が不可避であるが——像と重なる。

われわれはここに、自分の目を楽しませ耳を楽しませてくれる快いもの（こうした快感は受動的なものである）を闇雲に追い求める——というより、受動的に引きずられる——代りに、多なるものの中に協調と一体性を発見して行く精神にあらわれる〈美〉というものに注目したい。

当時のいわゆる音キチが、耳をそば立てて聞こえる音に熱中したり、ピュタゴラス派にしても、耳に聞こえる音の協和の中に数を探すことはしても、どの数とどの数とがそれ自体として協和的であるかを探求しようとはしない、しかしそれを探求するのは、善きもの・美しいものの探求のために必要なのだ、という言葉が、『国家』に見えている（Ⅳ 530A～531C）

〈音楽・文芸〉は、プラトンの対話篇の中で、時として、絵画術とともに、模倣術、遊戯ともされているが、⁽⁴⁰⁾しかしまた、〈哲学〉ときわめて密接な関係にあるものとしても語られている。⁽⁴¹⁾

〈知的〉ということは、最高度の意味では、右に見たように、断片的な仮設から推理して一方的に帳尻を合わせただけのものでなく、当の仮設の根拠ともなり、全体を統一している始原を望見する能力を意味し、調和・協和を観得する能力なのである。そして他方、〈知的〉は——快・苦に引きずられる受動状態に陥るものでなく——、これは能動的なものである。

われわれは、プラトンの言う〈音楽・文芸〉の例を、模写的絵画や、観客の情動に訴える模倣的演劇に見るのは見当違いではないかと思う。しかしこれはまた、別の論題として扱わなければならない大きな問題である。

〔注〕

- (1) Plato, *Respublica* X 596 B ~ E
- (2) 本稿第一章の冒頭の引用(前号一九頁)を参照。
- (3) 「i」 「守護者」(φύλαξ) と「補助者」(ἐπικουρος) について、『国家』で「守護者」の語がはじめてあらわれるのは、第二巻(374D)におおじてであるが、そこでは、理想のポリスでの分業の構想の中で、軍事に携る専門家として「守護者」が導入されたのである(373D~374E)。そして、こうした重要な任務を負うとともに大きな権限を委ねられる守護者たちは、子供の頃から「美しい品性」(cf. καὶ ἀγαθὴ φύσις III 402D)を植えつけられるように教育されなければならないのだとする観点から、プラトンは、神々や英雄の復讐・奸計・殺戮の物語を語る詩や、悲嘆の情をかき立てる調べ・音階(ᾠδὴν)などを批判していたのであって、本稿の前半、すなわち前号掲載の分は、以上のような文脈での、プラトンの文芸批判を扱ったのであった。しかしこうした教育の問題からさらに進んで、このように教育された守護者の中から「最高指導者たち」(ἀρχοὺς)を選ぶという問題に移るさい、プラトンは、特にすぐれた人々を「完全な意味での守護者たち」(ἐκτελέσταις καὶ ἀρχαῖς)と呼び、これに対して、「われわれがこれまで守護者と呼んできた若者たちは、最高指導者たちの決めた考えに協力する補助者(ἐπικουροί)、援助者(βοήται)と呼ぶのが正しい」(III 414B)として、この両者を区別することになる(以上 III 412B~414B)。「ii」 因みに、戦争と防衛・守備に関するプラトンの発言の若干を要約して記しておく。—— a. 戦争はすべて財貨(χρήματα)の獲得のために起こるのであるが、それを強いるのは肉体(σώμα)であり、つまりわれわれが肉体の世話に奴隷よろしく汲々として努めるときに、財貨の獲得を余儀なくされることになる(*Phaedo* 66C)。b. 財貨を無制限に獲得しようとして互いに隣国へと領土の拡大を強行するとき、両国間に戦争が起こる(不可可能にし、ポリス内の同胞に対しては、これら同胞に害をなそうという気持を起こさせないようにするものである (*Ibid.* III 414B)。d. 守護者たちは、ポリスの自由(ἐλευθερία)を作り出す厳格な職人であなければならず、これに寄与しないような他の営みに手を出してはならない (*Ibid.* 395B C)。なお、だからこそ守備者たちはむやみに模倣ごとに手出ししてはならないし、とりわけ卑しい人物・事物を模倣すべきでないという議論については、本稿第一章(前号、二〇—二二頁)を参照。
- (4) プラトンの文芸批判を主題とする本稿の目的のためにも、どうかするとナチズムを連想させるような制度の提案が、どういふ語調、どういふ意味合いで言われたのか、若干コメントしておく。「i」 守護者・補助者に対する私有財産禁止について。彼らは私有の住居も許されない上、ポリス内では彼らだけが、金や銀に触れることは許されないのだとするソクラテス

の提案(Ⅲ416D～417B)に対して、アディマントスは、もし誰かが次のように言うとなれば——つまり、他のポリスの支配者なら大邸宅を建てたり、金や銀を所有したりしているのに、この理想のポリスの守護者たちは幸福であるどころか、賃雇いの傭兵同然ではないか、と言うとすれば——あなたはどうか弁明しますか？ と尋ねる(Ⅳ419D～420A)。これに対しソクラテスは、いまは少数者の幸福ではなく、ポリス全体の幸福を考えているのだ(420C)と言うほか、貨幣(*útiqua*)が元凶となる多くの不敬虔な罪(*hubria*)のことを指摘して、わがポリスの守護者たちは魂の中に神的な金銀を持っているのだから、この世の不純な金銀を所有することは不用でもあり、不敬虔でもあると言うのである(Ⅲ416E～417A)。なお、他のポリスでは、民衆(*dēmos*)は支配者(*hēgoures*)を「君主」(*despotai*)などと呼び、後者はまた民衆を「奴隸」(*doúloi*)と呼んだりするが、この理想のポリスでは、民衆は最高指導者たち(*hēgoures*)を「救い守ってくれる人たち」(*sotēres*)、*「助けてくれる人たち」* (*erēkoupoi*)と呼び、彼らはまた民衆を「雇ってくれる人たち」(*paidodotai*)「養ってくれる人たち」(*trophes*)と呼ぶのだと言われていること(Ⅴ463A B)もつけ加えておく。「ii」男女共学・共職、配偶者・子供の共有について。まず第一に「友のものは皆のもの」(*φιλία καὶ σίτησις*)が大原則とされ、妻女の所有も、結婚・子供供の共有も、この大原則に従わなければならない、と言われるとき(Ⅳ423E～424A)、これは、他の一般のポリスでは、もはや一つのポリスとは言えないほどの分裂が生じていて、少なくとも、貧しい人々と富める人々との間に敵対関係があり、その両陣営それぞれがまた内部分裂しているという現状を睨んでいることである(422E～423D)。それに、富は贅沢・怠惰を、貧乏は卑屈・姑息を生んでともに有害なのである(421D～422A)。しかしこの理想のポリスでは、市民全体から養なわれ、彼らを守る守護者・補助者は何ものをも私有せず、配偶者も子供も共有する以上、全員が親族であって、皆が同じものを共有して「私のもの」と呼び、従って苦楽をも共有し、ポリスは一つのものとなる(Ⅴ462B～464A)、と言う。ソクラテスのこうした提案はしかし、對話相手に抵抗なく受け容れられたものではむろんない。たとえば男女共学の問題にしても、ソクラテス自身がグラウコンに向って、もしこれが実現すれば、女たち、それももういい年の女たちまでもが裸になって、相撲場で男たちといっしょに体育訓練に励んでいるという図が現出するだろうし、これが君にはとりわけ滑稽に見えるだろうが、しかしこれがそう見えるのは習慣からくるものでしかなく、この図を笑うのは、「善いもの」(*τὸ ἀγαθόν*)を基準にして「美しいもの」(*τὸ καλόν*)の判定することを知らない愚か者のすることだ、と言うのである(Ⅴ452A～E)。ところで、共学・共職の構想は、すでに第四巻でソクラテスが妻子共有の大原則を示した(本注「ii」を参照)後、幼児の養育の問題も含めて、その全体の具体策を語ってほしいという、アディマントスやグラウコンのたつての頼み(Ⅴ449B～451B)に対して、ソクラテスが多大の躊躇(450A～451A)を示しながら、ようやく話しはじめる構想の一環なのであって、この共学・共職に関しては、それが実現可能でもあり、ポリスにとって最善の方法だという点について、ソクラテスは

グラウコンらの同意を一応とりつける(450C~457A)。しかし、妻子の共有が実現可能かどうかについても、それが最善の策かどうかについても、多大の異論が起りそうなことは、グラウコンの指摘(457B)を俟つまでもなく、ソクラテス自身が十分に心得ており、だから、可能・不可能の問題は保留して、一応可能と仮定した上で、その具体策を考えて行くのである(457E~458B)。なお、こうした制度も含めて、ソクラテスの構想する理想の国制全体がそもそも実現可能なのか、また、どのようにして実現可能なかという問題が、やがてまたグラウコンから持ち出され(471C~E)、そこから哲人王の話に入るのであるが、第九巻の終りにいたって、ソクラテスの構想した理想のポリスは地上のどこにも存在しないと思う、とグラウコンが言い、ソクラテスが、だがそれはおそらく、天上に範型として捧げられてあるのだらう、と言っていること(592AB)もつけ加えておく。

(5) この問題についての、プロクロス以来の議論については、藤沢令夫訳『国家』(『プラトン全集』11、岩波書店、一九七六年)解説三(八一〇頁以下)を参照。

(6) 「正義」と「不正」は——たとえば「正しい人」と周囲の人々に思われる、ことよって得をするというのでなく——それ自体として実質的にどういう力を持つのか? と尋ねるアディマントス(=365A~367E)に対して、まさにその問いに答えるために、ソクラテスは、個人について調べる前に、個人より規模の大きい、ポリス全体についてまず考察するのである(368~369A)。

(7) 本稿第一章(前号 二五~二六頁)を参照。

(8) 守護者となるべき若者が「節制」(*sōphrosynē*)を養うべきだという点については、=389D~390A (cf. 410A)を「優美さ」(*eubēthrosynē*)の語については、402Dを参照(なお本稿第一章、前号二七頁を参照)。「音楽・文芸」(*mousikē*)の教育を身につけた、あるいはたしなみのある」という形容詞 *mousikōs* が、一般に「教養ある」を意味することは言うまでもないが、ここでは、同じ守護者の教育をめぐる議論の中で、次のようなプラトンの発言に注意しておきたい。——体育も音楽・文芸(以後、「ムーシケー」と記す)も、前者は身体のため、後者は魂のためにあるのではなく、両者とも魂のためにあると言うべく、ムーシケーに偏した人は柔弱になるが、体育に偏すると、「言論嫌い」(410D)となり、野獣のように暴力と粗暴さですべての目的を達成するようになる(410C~411E)。なお、この場合には、ムーシケーと体育が並列せられているが、「言論嫌い」の人は、最高指導者となる資格は全くないこと、「ムーシケー」と「哲学」の間に密接な関係があることについては、本文一五頁を参照。

(9) こうした批判が『ソクラテスの弁明』(29D E)や『ゴルギアス』におけるカリクレスとソクラテスの問答(481B sqq.)などから、最晩年の『法律』(X 889E~890A)にいたるまで首尾一貫しているのは言うまでもない。この『国家』におい

ても、権力政治、金力政治、無政府状態とも言うべき民主政治、そして最悪の形態たる独裁政治が、国制の墮落形態として語られているのも、言うまでもない(III~IX)。

(10) cf. III544 C, 563 E, 564 A etc.

(11) 注(4)の末尾を参照。

(12) 前号一九頁、本章八頁を参照。

(13) III401 B~403 C。本稿第一章(前号二七頁)を参照。なお、ムーシケーの教育が、知的教育ではなく、習慣づけによる教育であるというプラトンの見解については、第七巻(522 A B)を参照。

(14) たとえば『ゴルギアス』におけるカリクレスは、自然本来の正しいあり方では、すぐれた有能な人は、自分の欲望に忠実であるべきだ、しかし無能な大衆はひけ目を覚えるが故に、反自然的な「節制」だの「正義」だのを賞賛して、すぐれた人々を隷属させようとするのだ、と言い(91 E~93 C)、これに対してソクラテスが批判しているのが見られるが、ほんとうに弱肉強食が自然本来のあり方かどうか、徹底的に追究し、「正しさ」を自然実在に根ざすものとして位置づけうる自然観を構想するのか、プラトンの最大の課題の一つであったことは言うまでもない(cf. *Leges* X888 E sqq.)

(15) 正義とは強者の利益である、すなわち、どんな政体においても支配階級が強い者であるが、この支配階級が自分たちの利益になることを被支配者にとって正しいことだと宣言し、違反者を不正な者として罰する、従って単発的に不正を犯すと罰せられ非難を受けるが、ポリス全体を手中にしてしまえば、かえって幸せ者と呼ばれるのだ——というトラシユマコス的主張については第一巻(343 B~344 C)を参照。

(16) プラトンが「個人」というものを多元的存在として捉え、各個人をいわばミクロ・ポリスとして考えていることは第四巻(334 D sqq.)ではつきりする。

(17) 政府や政党が大衆を動かすべく、麻痺的效果を持つものとして、しばしば音楽の効果を利用することは、現代のわれわれも十分知っていることであるが、プラトンはまさに、そういうムーシケーと、それに同化する大衆のメンタリティーを批判しているのである。

(18) この部分は最初「非合理的な欲望的部分」(cf. ... *akoyorobē te kai ēndymnēteōs* N439 D)として導入されるが、これは後に、睡眠中に頭をもただてくる愚かで恥知らずな「獣的で猛々しい部分」(cf. ... *thymōdes te kai thymōs* K571 C)と言われ、さらにまた「不正」を働く放埒な暴君を引きまわしている、多頭の荒々しい怪物(588 B~590 C)と呼ばれる。

(19) 注(16)を参照。

(20) III544 D sqq.

(21) 562A sqq.

(22) 本稿第2章(前号三一頁)を参照。

(23) すでに述べたように(五頁)『国家』の主題が何であるかについては、古来多々議論があり、第十巻の最後では、死後の魂の運命を語るエルの神話が語られていて、これが全巻をしめくくっているものであって、〈正しい人〉が『国家』の主題だとも言える。

(24) このムーシケーによる教育の問題が『法律』においても、第二巻を通じて詳細に扱われていることもつけ加えておく。

(25) 第十巻におけるプラトンの文芸批評についての近代人のコメントについては、第1章(前号二三〜二四頁)を参照。
なおわれわれは近代解釈から若干のものをつけ加えておく。

i. 「美(*kalos*)」とかその逆の意味の語だとかは第十巻では一度も芸術作品(*a work of art*)に対して用いられてはいない。……プラトンが美(*beauty*)の例を挙げようとするとき、芸術作品よりも動物(*zōon*)だとか家具(*σκευός*)のほうを常にと言っつてよいほど選ぶのである。……しかし彼が芸術を美と結びつけない限り、彼がポリスから芸術を追放しても、彼が最初から自分のポリスの市民たちに必要なものとして認めていた美を、彼ら市民から奪っているのだという観念は少しも持つ必要はなかった。……だから、彼には、かつて人類の発展の本質的な規準と呼ばれていたものを、芸術の抑圧によって侵害しているのだという考えは起こらなかったであろう。というのは、芸術が行なわれようとそうでなかろうと、彼は、ポリスの制度や生活において美への要求を十分に満足させていると考えたであろうからである」(Murphy, N. R., *The Interpretation of Plato's Republic*, Oxford, 1951, pp. 233~234)

但しわれわれとしては、第三巻で、音楽・文芸について〈美しい語り方〉(*καλὴ λέξις*)だとか、その他、優美と訳した“*eurythmía*”といった語がいろいろと用いられていたことを指摘しておきたい(本稿第1章、前号二七頁を参照)

ii. 「ロマン派の人々は詩や絵画について、これを生の、いや実在のとさえ言うのであるが、それを解釈するものだとする。しかしこうした説を聞いた後では、プラトンの攻撃はむしろ斬新だということもつけ加えてよいだろう。芸術に従事する人々が、真実を明らかにすることに関心を持つよりも、むしろ娯楽の見地で美しいものを作り出すことのほうに、より関心を持つなら、そのほうが芸術にとってより善いとさえ言えるのであろう。プラトンのこうした攻撃の明らかな弱点は、その根拠となっている複雑な心理学——つまり、絵画愛好が非合理性(*irrationalism*)を助長すること、そして、舞台の上で悲劇的な激情がくり広げられているのを見るということは、そのまま、見ている本人がこれに感染して同じように演技しがちになることを意味すること、とった事柄への確信——にあるのだ。」(Crombie, I.M., *An Examination of Plato's Doctrine*, London 1969, Vol. I p. 150)

しかしわれわれとしては、観劇による同化や、大衆演説への付和雷同こそ、プラトンが最も大きな問題の一つとした、当時の現実であったであろうことを、つけ加えておきたい。なお、人間の〈理知的部分〉と親近性のある芸術の可能性については後に(一四頁)論じる。

- (26) cf. Cross, R.C. and Wooley, A.D, *Plato's Republic—A Philosophical Commentary*, Macmillan 1966, p. 284
- (27) 本章冒頭の引用を参照。
- (28) Crombie, *op. cit.* p. 147. なお前号三六～三七頁の注(25)を参照。
- (29) *Republic* V 474C sqq.
- (30) バーネットのテキストでは“*ἀνθρώποις*”。しかし岩波、藤沢訳とともに、シュンケン写本の“*μνηστέροις*”を採用(前号三一頁の引用も同様である)
- (31) *Apologia Socratis* 20A B
- (32) *Protagoras* 311B～314B
- (33) *Gorgias* 448E～453A
- (34) 注(25)を参照。
- (35) *Gorgias* 452E
- (36) *Republic* VI 509D～511A, cf. 533D～534B
- (37) *Ibid.* 532D sqq.
- (38) *Phaedo* 96A sqq.
- (39) *Ibid.* 97C～98B
- (40) e.g. *Cratylus* 423D, *Sophista* 224A
- (41) e.g. *Phaedo* 60E～61A, *Timaeus* 88C